



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第3主日B年(2021年1月24日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：ヨナの預言 3章1-5、10節

第二朗読：使徒パウロのコリントの教会への手紙 7章 29 - 31 節

福音朗読：マルコによる福音書 1章 14 - 20 節

今日のテーマ：「^{あたら}新しい^{とき}時」はイエスさまと^{とも}共に^{はじ}始まる

三つの朗読から

第一朗読の冒頭に「主の言葉がヨナに臨んだ」(1節)とあります。神のことが人に迫ってきます。目の前に神のことがやってくるというイメージです。主である神のことがと、それに対する人間の対応、これが『ヨナ書』のテーマです。神のことが迫ってきて、ヨナは逃げたり、避けたり、拒絶したりしますが、結局、神からのことがよって神を信じるようになります。

第二朗読の「定められた時」(29節)という神のことは、わたしたちの目を覚まします。日常の中に埋没して生きていても、キリストとの決定的な出会いの時がさし迫ってやってくるのです。第一朗読では神のことが迫ってきました。今度は神の時が迫ってきます。その時を意識するか、しないかで生き方が変わってくるでしょう。神の時はカイロスです。それは計測可能な人の時であるクロノス(英語の clock クロックの語源)とは異なります。神は一人ひとりに「定められた時」をお与えになるのです。

「過ぎ去るこの世の有様」(31節参照)の中に埋没しているわたしたちには、その時が分からないのでしょうか。

福音朗読にある「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(マコ1章15節)というイエスさまの宣教の第一声は、新しい時が始まることを告げます。イエスさまのことがと共に、新しい時は始まるのです。それは、クロノスではないカイロスです。その時は、「すぐに」「捨てる」ことを要求する、差し迫った時です。

説教

今日の福音を一読すると、回心というテーマが浮かび上がってくるでしょう。回心は自分の力ではできません。もし、自分の力や努力でなされるのなら、それは改心です。回心と改心は違うのです。回心には、神の介入、助けが必要です。第一朗読に登場するヨナは最初、神からの呼びかけに応えなくて逃げました。しかし、神がヨナに、魚の中で三日三晩過ごす体験をさせて、回心させます。今日の第一朗読は回心した後のヨナの働きが描かれています。

福音朗読では、イエスさまがシモンとその兄弟アンデレを御覧になります(見ます)。この見つめる眼差しはどんなものだったのでしょうか? そして、声をかけます「わたしについて来なさい」。どんな声の様子だったのでしょうか。イエスさまの眼差し、イエスさまのことばを想像してみてください。見つめられ、声をかけてもらって、そして個別に呼び出されて、人は神の方へと向きなおっていくのです。それが回心です。

ところで、三つの朗読では「時」のテーマが展開しているようです。第一朗読では四十日という差し迫った時。第二朗読では定められた終末の時。福音ではイエスさまによって始まる、神さまが救いの計画を実行し始める時。どれも計測不可能な時(カイロス)です。いわば神の時でしょう。

イエスさまに呼びかけられて、イエスさまに従って生きていこうするのが回心です。それは、この世の時間(クロノス)の流れの中で生きながらも、もっと雄大な神の時間(カイロス)があると気がついて生きていく生き方なのです。

